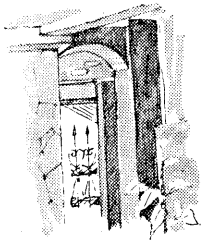
ヨーロッパの旅(八)

平井信義



ブーローニュの森は、凱旋門から西南へと続いている広大な森である。

十五年前、有名なデブレ教授の紹介で国際児童センターを訪れることになった時に、私はこの森の中で迷子になったのである。センターがブーローニュの森の西の一角にあるときき、私は凱旋門で地下鉄から出ると、その森の中へと歩き出したのである。

森――などといっても、パリーの市内にある以上、二〜三〇分も歩けばセンターに着くであろうと、たかをくくって歩き出したのであるが、行けども行けども、森を抜けることができなかった。方向を間違っているのではないか。だんだんと不安になってきた。当時は人影もまばらであって、容易に人に出会うような状態でもなかったので、見当――といっても誠に当てにならないものであったが――をつけて歩くよりほかはなかった。たまたま出会った人にセンターのことをきいてみても、「よく知らない」「わからない」という答が返ってくるだけであった。

私は、非常に心細くなったり、その上、足の疲れも次第に強くなった。フランス語を話すことのできない私は、英語で道順をきくのであるが、英語をよく知らないパリー人も少なくないこともあって、私の質問に対しては、道の見当もつかないような結果になったのである。それでもどうやら少しずつ見当が決まり、センターの白い建物を目の前に見たのは、歩き始めてから二時間以上

もたっていたであろうか、足は棒のようになっていた。

それでも、自分のからだを鼓舞しながら、大きな建物の高い天井の玄関に立ち、受付に紹介状を示すと、その男の指さす方向に二階への石段をのぼり、二百何番かの部屋の扉をノックしたのであった。女の人の返事があって、扉を押して入ると、若い黒人の女の人が机の前に坐っているのが目に入った。近づいて型の如く握手をして、日本の小児科医であることを告げ、デブレ教授からの紹介状を手渡した。

封を開いてそれを読んでいた女の人は、「残念ながら、この部屋のディレクター（何とか言ったが名前は忘れた）は、いま休暇中なので、ご案内することはできないが……」と言いながら、自分の脇にある引き出しを次々にあけて、十何枚かのパンフレットを渡してくれた。その女の人の丸い眼の中にひかる白い目と、赤くつき出た唇とが、今でも印象に残っている。

国際児童センターは、結局は事務所であった。子どもに関する各国の研究の援助をしたり、講習会を聞いたり、各種の文献を整備して、利用者の便利をはかっていた。だから、子どもの姿はここでは見ることができなかった。しかし、二〇年計画で、子どもの発達に関する追跡的研究が始められることを知った。

すなわち、生まれたばかりの赤ん坊が青年期を終えるまで、継続的に追跡するという研究である。これによって、個々の子どもの発達の実態が把握できるし、それを系統的に整理することができれば、これまでの平均的な発達観がすっかり是正されるであろう。

私どももすでに二年前から、三歳以後の子どもの追跡を始めていたから、非常に興味をもったし、この計画に加わることができれば——と思ったりした。しかし、予算的にすでに五カ国が選ばれており、研究計画は整っているということであった。その後、今日まで十五年を経ているが、中間報告はいくつか発表されているが、本格的な発表がないのはどうしたわけであろうか？

それは、恐らく、二〇年間の研究計画だからであろう。ヨーロッパに来てみて驚いたことは、実に根気よく研究を続け、それがきちっとした段落をつけられるまでは、学会へも発表しないということである。西ドイツにいる私の同僚なども、二～三年前に書いた論文を机の中にしまっていて、何回かそれを読み直しては、新しい研究をつけ加えていくということをしていた。

それに引きかえ、わが国の研究には、短期間でちょこちょことまとめられたものが何と多いことであろうか。そのような研究には結論を急ぐものが多く、そうした結論は子どもの真実の姿から遠い。中には、子どもを害するような結論のものもある。私自身

の過去にも、そのような研究があったことを反省せずにはいられなかった。本当の研究というものは、実に年月を必要とするものであり、特に発達がその中心となっている子どもについては、追跡研究が非常に必要なのである。

今回のブーローニュの森のドライブでは、すでに夕方になってもいたし、当面の用事は何もなかったので、その白い建物に夕暮の影をおとしているのを眺めただけで、走り去ってしまった。そして、高くそびえる木立のそこここにひろがる芝地のそばで車をとめ、そこに腰をおろしている幾組かの家族の団欒を眺めながら日本の家庭のことを思い遣ったのである。

日本の家庭において、このような団欒が一年に何回ぐらいあるであろうか？　父親もいる、母親もいる、そして子どもたちもいる、それが、二た家族で連れ立ってこの森にやってきている風情もあった。親たちは親たちで思い思いの話をしていた。あるいはハンケチを顔にかけて大の字にねそべったりしている男親もあった。そのまわりでボールを投げ合ったり、棒片をもって走りまわっている子どもたちもいた。

私もこの森で昼寝を楽しんだことがある。それは、一昨年の春のこと、国際児童センターで友人と待ち合わせることを約束していたが、その時間よりも遙かに早くセンターに着いてしまった。そこで、この森の中に入り、手頃な大木の下で、やや傾斜した場所を選んで仰向けにねた。やわらかい芝草が快く私をつつんでくれるようであった。空は梢の上にひらけており、ヨーロッパの春も淡い青色をただよわせていた。鳥のような黒い羽をした鳥が羽を大きく動かしながら、飛び交っている。いろとりどりの羽の色をした小鳥が、それも思い思いの飛び方で、木々の小枝を渡りあるいている。耳をすますと、さまざまな小鳥の囀りがきこえてくる。私は、いつの間にかねむりに落ちていった。

目がさめたのは、近くに走りまわっている子どもたちのはしゃいだ声によってであった。その時、ふと、パリーに来ていることを忘れていた。いったいどこにいるのだろう――と一瞬いぶかったが、子どもたちの金髪が、パリーにいることを自覚させてくれた。

約束の時間までに更に小半時もあったので、私は、子どもたちの遊ぶ姿を眺めながら、ああ、日本の都会にも、こうした森が欲しい、子どもたちのためにも、大きな林が欲しい――としみじみ思った。

今の日本の都会の子どもたちはこうした森も林も知らない。鳥

の飛び交う姿や囀りも知らない。草地さえも知らないのではないか。知識をもってはいるだろう。しかし、体験していない。

私は毎年六〜七〇人の子どもたちを連れて高原で合宿をするがその子どもたちの中には、草地で裸足になると、「気持が悪い」と叫ぶ子どもが現われてきた。林の中につれていくと、小枝やくもの巣をきらう子どもが多くなっている。道のないようなところを切り開いて進む勇気は更にない。大きな茸がそこここに生えている。「きのこがあるぞ！」と子どもたちを呼び寄せると、「それは何科の何属だよ」と知ったようなことを言うが、じっと見詰めようともしないし、手を触れようともしない。百科事典やテレビの知識はあっても、自然の本質に触れようとしないのである。

ああ、子どもたちに林を与えたい、森を与えたい、川を与えたい——自然を与えたい！ 今回も、再びその思いに駆られながら、ブーローニュの森を自動車で抜けた時には、すでに西日が沈もうとしている時で、凱旋門の裏は赤黄色に輝いていた。

翌日、ルクサンブール公園のそばを自動車で走り抜けたが、中に入る時間的な余裕がなかった。実は、ちょっとでものぞいて、子どたちが戯れている姿を見たかったのであるが、それは許さなかった。幾度か来た日のことを思い出す。一昨年来た時にはちょうど二時を過ぎていたが、茶店（といってもレストラン）の外にあって木立の蔭になっている食卓の前の椅子に腰をおろして、ビールを注文した。疲れて喉がかわいている時のビールは、フランスのものでもうまい。疲れも休まる。

その食卓から斜め下に、——それは公園の中心部に当たるのであるが——人工的に作られた浅い池がある。その池を、子どもたちが好いているのである。手をひたしてもよい。水をひっかけてもよい。舟やヨットの玩具を浮べてもよい。以前来た時には、ここで玩具のヨット大会が催されていて、なかなかの壮観であった。大会がなくても、いつも何艇かの、ヨットが走りまわっている。今回も、ちらちらとヨットの小さな帆が見える。そうなると、私は池に近づいてみたくなる。子どもたちの嬉々とした表情に接することができるからである。

休息もそこそこに池のふちに降り立つ。父親といっしょに来ている子どももある。友人を誘って来ている子どもたちもいる。思い思いのヨットをその上に浮べる。そよ風にさそわれて、ヨットは走り出す。それは、ひたひたと音を立てているかのようであり波を切っているようでもある。子どもたちは、自分のヨットの動きを追いながら目をすえている。何回もヨットとヨットが、帆と帆とがゆき交う。ぶつかりそうになりながら、たくみにすれちが

っていく。向こうの岸に着きそうになる頃、ヨットは巧みに自力で回転する。子どもたちはそのことを知っているから、ヨットを水におろした地点から動かない。じっと近寄ってくるのを待っているのである。近寄って来たヨットに水をかけようとする子どもがあると、「ヘイ」と大声を立て、眉間にしわを寄せて怒る。

子どもたちの想像は、すでにヨット上の人になって、大海原を航海しているのであろうか？　あるいはキャプテンの気持になっているのであろうか？　そよ風のある限り、航海は続いていく。

このような情景を眺めているのは、何とも楽しい。あきることがない。子どももまたあきることがない。たそがれになって、家に帰る時間がくるまで、子どもの想像は続くのである。それを、誰れに見せるというのでもない。ほめてもらう意識もない。子どもの心とヨットの心とが一体になっているといった感じである。旅の疲れがいやされるのは、このような時であるといってもよい。忙しく過ぎる旅の砂漠の中で、オアシスにめぐり合ったような感じがする。

今回のパリーの滞在中、久し振りにヴェルサイユ宮殿にいった。十五年振りである。大きな宮殿、彼方の果が小さく見える運河、そして、小宮殿、田園をかたどった庭、それは目を見張るばかりの大がかりなものではあったが、私の心に滲みこんでくるものは余りなかった。これを作った動機がどこにあったのか？　そこには自己を誇示する姿が汲み取れた。このような姿は、西欧の文化の特色とさえ考えられる。モンマルトルの丘にあるサクレクール寺院にしても、アンバリッドにしても、あるいはエッフェル塔にしてもそうである。

その点で、私は、京都の修学院を見せていただいてあったのは実に幸いだったと思っている。全く自然の中に埋没したその美しさは、世界に類例のないものと、私には感ぜられたのである。しぶ味のある小さな建物、灌木に囲まれた池、そして池につき出した亭、その脇につながれた小舟。ただの一回しか拝観する機会がなかったし、そしてまた、一時間という限られた時間で一周しなければならなかったし、しかも十六、七年も前のことになるが、その一つ一つが私の脳裡にはっきりと刻まれているのである。修学院を見たお陰で、私は、西欧のものに驚かないで済んだ。西欧の文化には、何か稚拙さが感ぜられた。そして、わが国の文化のもつエスプリを、どのようにしてわが国の子どもに伝えるべきかその方法は何か、――と考え込んでしまうのであった。

ヴェルサイユ宮殿から車を飛ばしてランブイレ宮殿にいった。

小さい宮殿ではあったがその建物には蔦が青々とからんでおり、庭の花も、小じんまりと咲いていた。池には白鳥が泳いでいて、二、三歳の男の子をつれた中学生ぐらいの女の子が、白鳥にパン屑を投げ与えていた。私の心は、むしろ、この方が落ちつきを取り戻す。池のふちになっている石の欄干に腰をおろして、子どもたちが鳥と戯れているのに、しばらくの間目をおとしていた。白鳥が動くたびに、水の面には小さな波が立ち、きらきらと輝きながら、岸へと静かに寄せてくるのである。ほかに誰もいなかった。森閑としていた。何かヴェルサイユ宮殿から逃れてきた——という感じさえした。

林に入ると、マロニエの実がころがっていた。それを拾い上げて、ハンケチでふくと、こげ茶色のつやが輝き出る。いく筋かの縞模様も美しい。二つ目を見つけ、また三つ目を見つける。その時、ポタッという音がして、目の前に落ちてきたいがが割れて、その中から転り出たマロニエは、粒が小さかったけれども、更に美しく輝いていた。私は、その四つ五つのマロニエの実を、自分の手で暖めた。私の手のぬくもりが次第にマロニエにうつっていくようでもあり、マロニエの実のすがすがしい冷たさが、私の手にうつってくるようでもあった。私は、しばらくの間、マロニエの実の感触を楽しんだのである。

今月の参考図書

●幼児の心理発達的特質を見分けるために
幼児の心理的発達
山下俊郎著
A5判290頁
定価800円
〒90円
幼児の心についての科学的知識を養うために乳児から五歳までの年齢段階別幼児の心理発達をわかりやすく解説

●幼児の行動の評価にあたって
幼児教育の評価
——その観点と基準——
三木安正編
保育内容研究会著
B5判130頁
定価500円
〒90円
〝人間関係のプロセスの評価〟を観点とした幼児の活動に対する意欲・理解・行動・技能4面にわたる評価の試み

●指導記録の参考例として
幼児の生活と教育
海卓子著
A5判350頁
定価450円
〒90円
長年の保育経験から生み出されたユニークな幼児教育論集団生活を根底とした数々の指導記録及び指導の観点を含む。
フレーベル館発行